



付録資料
[新聞連載]

1 新聞連載「パラオで発見！教育の種」

沖縄タイムス 2024年9月8日(日) 教育15面

授業を実践 貴重な経験

パラオで発見！

教育の種

JICA沖縄教師海外研修

1



国際協力機構（JICA）の国際協力に興味を持ったことをきっかけに「自身の学びと体験を子どもたちに伝えたい。まずは挑戦！」との思いで教師海外研修に応募した。参加決定の知らせに、自分事のように喜んでくれた家族や学級の子どもたちからのエールを胸に、沖縄から約2200キロ離れたパラオ共和国に旅

島津侑実教諭（安謝小）

戦前、日本の委任統治下にあった同国には、約1万3千人のウチナンチュが暮らしていた。その後の悲惨な戦争の歴史、戦後のアメリカ統治、海に囲まれた地理的環境など、沖縄と似ていることも多い。また気候や植物、ゴーヤやドラゴンフルーツ、ポーク



パラオ高校で折り紙を教える島津侑実教諭（右から2人目） 11月7日、同校

沖縄にいるような親近感

たまごなどの食べ物、人々の温かさに触れるたびに、沖縄にいるような親近感が湧いた。特に「おいしい」は「アジサイジョウブ」、「先生」は「センセイ」、「乾杯」は「ツカレナオス」と日本語由来のパラオ語には、思わず笑みがこぼれた。

今回、現地の小学校や高校

を訪問し、授業の様子を参観するだけでなく、授業を実践する機会が与えられたことは貴重な経験となった。英語で日本や沖縄のことを紹介したり、ダンスや空手を教えたり、平和について考えたりする授業を行った。パラオの子どもたちが意欲的に取り組む様子を見て「学びたい、知りたい」という探究心は、国や地域が異なっても変わらないのだと痛感した。

また、目を輝かせて夢や目標を語る姿が印象的であった。子どもたちの笑顔のため

に帰国後、パラオでの体験をどのように伝えていくかを考える胸が高鳴った。その一方で、パラオの教育の現状として共働き家庭が多いことやSNSの普及などで家族だけの時間が減少していること、教員不足や母国語の継承問題など、沖縄と共通する課題があることを知った。

「世界をつなぐ教育の種まき」。さあ！ 沖縄の子どもたちに、沖縄（日本）とパラオ、そして世界とのつながりをどのように伝えていこうか。子どもたちがいろんな花を咲かせられるよう、教育者として日々、子どもたちと共に成長していきたい。

県内小中高の教師6人が7月22日から8月1日までパラオを訪れ、国際協力への理解を深めた。交流を通し、学んだことや感じたことを報告する。（毎週日曜掲載）

提供：沖縄タイムス社

パラオ語喪失に危機感



■ 2

4月に育児休暇から復職し、3人の子の育児と教員の仕事との両立に手いっぱいだった私が以前より興味を抱いていた本研修に挑戦できたのは、家族や職場の協力があつたからだ。



初めて訪れたパラオの街中には、戦前の日本統治時代

論教里香絵銘 當 (高嶺中)

多くのウチナンチュが移住し、形成されたウチナー文化の影響を至るところで感じる事ができた。商店にはポークたまごおにぎりやポーポーに似ている総菜が並び、サーターアンダギーは「タマ」という名で今も地元の人々に愛



コロナ小の教頭(中央)と意見交換した當銘絵里香教諭(右)と、島津侑実教諭(7月20日)

次代へつなぐ 言語や文化

されていた。

また、言語にも日本の影響が大きく残っている。パラオではパラオ語と英語が公用語となっているが、パラオ語には日本語由来の言葉が約千語存在しているのだ。野球は「ヤキュー」、選挙は「センキョ」、おいしいは「アジダイジョウブ」と言い、言葉とともに日本の文化がパラオに根付いている。

しかし最近ではパラオ語を話せる人口が減少し、英語でコミュニケーションをとる割合が多くなっていると、現地の小学校の教頭先生が話してくれた。「自国の言語が使われなくなることは、アイデンティティーを形成する重要な要素が失われることにつながるため危惧している」という。日本人やウチナンチュが過去にパラオで築いてきた文化

の消失につながることも気づき、寂しい気持ちになった。私の生まれ育った沖縄でもうちなーぐちを話す人口が減ってきている。英語教師として英語で広がる可能性を伝えていくことはもちろんのこと、自分のコミュニティーの言語や文化を次世代へつないでいかなければならないという使命感を強く感じた11日間であった。

本研修を通して学んだことを私の子どもたち、生徒たちに伝え、彼らの新しい学びにつなげていきたい。そして勇気を出して挑戦すること、学び続けることで拓ける世界があることを伝えていきたいと思う。Step out of your comfort zone. 一歩踏み出すことで何か変わるかもしれない。(毎週日曜日掲載)

途上国支援の意義自問

パラオで発見!
教育の種
JICA沖縄教師海外研修

■ 3



国際協力機構(JICA)では1980年代からパラオへの協力を開始し、インフラ事業や環境保全、医療、教育など幅広い分野で支援を行っている。いろいろな国旗の看板を至る所で見かけ、どの国が支援したのかが分かるようになっていた。「パラオはいろんな国に助けられているんだな」と思いながら町中を歩いた。

大城莉子教諭

(宮里小)



研修では、さまざまな企業や団体から話を聞く機会があった。話をしてくれた方々は、パラオの課題に向き合い、誇りと使命感を持って活動していることが表情から伝わってきた。

印象深い視察先の一つに環境配慮型交通システム整備プロジェクトがある。公共交通

協力関係の必要性を痛感

の整備はパラオに来て課題だと感じていたこともあり、プロジェクトの話聞き、課題が解決へと向かっている様子を感じることができたからだ。

パラオは過度な自動車利用により、環境や健康などのさまざまな課題に直面している。プロジェクトでは主要地を回るバスを整備し、オリジナルのキャラクターをデザインした広報物を作るなどして新しい行動文化の醸成を目指しているという。

現地で過ごす中で、運転ができない高齢者の姿や、タクシーが見当たらない現状を目にして、交通の不便さを感じていた。しかし、バスに試乗した際やナイトマーケットの日には多くの方が乗車しており、島民のみならず観光客に

も認知され、利用されていることが分かった。パラオのためになっていることを実感し、関わる方々の思いも相まって喜びを感じている自分だった。

一方で研修中、「援助慣れ」という言葉や、支援した物資が使われずに放置されている現状も聞くことができた。それでも支援を続ける理由には政治的背景もあることを知った。

「何をもちて支援と言えるのか、支援だと思っていたことは果たして」と自問した。今回の研修は私の価値観を改めるものとなった。必要だと思ってしまうことが自己満足になっていないか、人々の思いに耳を傾け、自立した未来に向けてお互いに協力していかなければならない。そんなことを考えさせてくれる1日間だった。

現地の交通課題について説明を受ける大城莉子教諭(右)ら17月25日、パラオ

(毎週日曜日掲載)

提供：沖縄タイムス社

戦争遺物に悲惨さ体感

パラオで発見！
教育の種
JICA沖縄教師海外研修

■ 4

平田真弓教諭
(那覇高)

けに過ぎない。しかし、その発言から私たちの平和教育が生徒にはマンネリ化しているのではないかと考えるようになった。

今回私が教師海外研修を希望した理由の一つに、パラオ

「どうせ、沖縄戦のことをやるんでしょ？」

以前私が勤めていた学校で、授業開始時に生徒から言われた言葉である。

その生徒は、沖縄戦を学ぶことに否定的だったわけではなく、慰霊の日が近づくとつれ、沖縄戦関連の授業や講演会が増えることに対して感じた思いを伝えた



再軍備 沖縄と重なる不安

の視点から平和を考える教材を作りたいという思いがある。

研修では、地上戦が繰り広げられたペリリュー島を訪問することができた。

島に到着するとまず目にするのが日本語で書かれた「ペリリューへようこそ」の文字である。80年前、確かにこの地に多くの日本人がいたのだと実感した。また戦時中に使用されていた戦車や爆弾等がそのまま展示されており、私たちは直接触れることができ

る。戦跡ガイドの平野雅人さんによると、戦争の遺物をむき出しのまま展示しているのは、より当時の様子を私たちに感じてほしいという思いからだそうだ。

木々が生い茂る自然豊かな環境の中、ぽつんと置かれてある戦車が私にはとてもアン

バランスに感じられ、より戦争の悲惨さを体感することができた。

ペリリュー島にはかつて「東洋一」といわれた飛行場があり、現在の跡地は米軍によって再整備が進められている。台湾有事に備えるためといわれている。再びペリリューの地が戦禍に巻き込まれるのではないかと不安を覚えると同時に、沖縄がペリリュー島と重なって見えた。

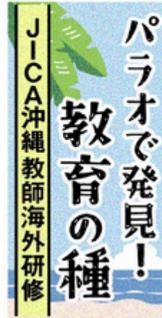
パラオでは、平和や国際協力について自分が疑問に感じていることの答えを探す旅にしたいと考えていた。

しかし実際にパラオの研修を終えた今、今まで以上に多くの疑問が残る形となった。これから授業の中で生徒とともに「なぜ？」「どうして？」の答えを追究することになるだろう。その中で新たな気づきが得られることが楽しみである。

95式軽戦車について説明する戦跡ガイドの平野雅人さん(7月27日、ペリリュー島)

(毎週日曜日掲載)

沖縄の誇り 考え続ける



■ 5

「私には沖縄の血が流れている。だから皆さんを受け入れようと思った。沖縄をよろしくね」

パラオ滞在最後の夜に史子さんが言ったこの言葉を、私はいつまでも忘れないだろう



仲松友美教諭
(西原中)

う。

金城史子さんは、11日間のパラオ研修で宿泊したホテルのオーナーだ。戦前パラオ人の母と沖縄出身の父との間に生まれた。戦時中いくつかの困難を経験したが、何とか生き延びた。その後もさまざまな苦労がありながら、パラオ



パラオ最後の夜に金城史子さんを囲む仲松友美教諭(手前右)ら。7月31日、コロール州のホテル

94歳女性の言葉に学ぶ

の観光業発展のために尽力し、沖縄にも何度か訪れている。今年で94歳になる。

私たちは7月31日の夜中にパラオに到着した。史子さんは、自宅がある2階のベランダで私たちの到着を待っていていた。歩行器を使って歩いている以外は、94歳にはとても見えなかった。温かく迎えてくれ、滞在中はいつも気にかけてくれた。夕食が一緒に飯やおかずを用意して待っていてくれた。ある日はパラオ語を教えてくれたり、ある日は伝統料理の作り方を教えてくれたり、毎日私たちにたくさんのお話を教えてくれた。

「沖繩から先生たちが来ると知ったから」。そして、「私には沖繩の血が流れているから」と話してくれた。史子さんの沖繩への深い思いや誇りを感じ、シヨックにも似た衝撃を受けた。パラオから帰国して3週間がたった今も、「私には沖繩の血が流れている、だから…」この先の言葉をずっと考えている。

沖繩で育った一人として、沖繩県の教員の一人として、何をするのか何をしなければならぬのか、沖繩の誇りをもって生きていけるよう、これからも考え続け、答えを探していきたい。

(毎週日曜日掲載)

沖縄の塔で曾祖父思う

パラオで発見!

教育の種

JICA沖縄教師海外研修

6



渡航前に分かったことだが、私の曾祖父がパラオにいたという。初めて知ったその事実には、パラオとのつながりを感じた。ペリリュー島やコロール州にある沖縄の塔に手を合わせながら、この地のどこかで最期を迎えた曾祖父

小橋川利奈教諭

(鳩間小)

ローカルマーケットでの交流を楽しむ小橋川利奈教諭(後列右から2人目)ら=7月25日、コロール州



父やウチナーンチュのことを思った。11日間の研修でたくさんの出会いがあった。公園で開かれるマーケットで「小さい頃、オキナワの人に親切にしてもらったから、私にも何かさせて」と、ランチをこちそうしてくれた年配の女性。市民の足として利用

つながる大切さ伝えたい

できるよう、公共交通の課題解決に取り組んでいる日本企業の皆さん。ごみ処理や未活用資源を利用した商品開発に取り組み、支援している日本人の方たち。滞在先としてお世話になった、パラオで生まれ育ち、戦前・戦後を知る沖縄県系人の金城史子さん。史子さんには、パラオの伝統的なタロイモ料理と一緒に作りながら、パラオの文化や風習について教えてもらった。「自分ができていることを一緒にやる」。現地で出会った皆さんのパラオへの思いや使命感が伝わってきた。研修の最終日。パラオを離れることを寂しく感じた。それは、パラオという国が、大切なものを思い出させてくれたからだと思う。それは「つながり」だ。曾祖父やパラオで暮らしたウチナーンチュとのつながり、自分にできることをパラオのためにと尽力する日本人や現地の方々とのつながり、この研修で出会い同じ志をもった先生方とのつながり。どこにいてもオンラインで気軽につながれる世の中になったが、実際に自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じる体験を通じたつながりは、大人子ども関係なく必要なのだと感じた。「教師として何を伝えられるのか」。そう問われた時、私は「つながる」大切さを伝えていきたいと思う。それは、家族、友人、地域、世界とつながり、大人子ども、年齢関係なく「自分ができていることを一緒にやる」。その「つながる」意識をもって、私自身が生きた教材になり、子どもたちや学校、地域をつなげる存在になりたい。(おわり)

提供：沖縄タイムス社

スタッフ

JICA沖縄 市民参加協力課

木田克人 田中知恵

JICAパラオ事務所

青木恒憲 森淳希 矢野史俊 井上栄

JOCA沖縄

伊藤丈和 垣花拓実 米須理恵

教材作成アドバイザー

NPO法人 沖縄NGOセンター 奥山有希氏

2024年度 JICA沖縄

教師海外研修 報告書&ワークショップ集

発行

2025年3月

発行者

独立行政法人国際協力機構 沖縄センター（JICA沖縄）

〒901-2552 沖縄県浦添市前田1143-1

TEL：098-876-6000/FAX：098-876-6014

研修実施団体

公益社団法人 青年海外協力協会沖縄事務所（JOCA沖縄）

〒904-0011 沖縄県沖縄市照屋1丁目15番4号

TEL：098-943-7801

